

医療ソーシャルワーカーを描いた漫画作品による職業像に関する一考察

村 上 貴 栄

キーワード：医療ソーシャルワーカー、漫画、職業像

要旨

医療ソーシャルワーカー（以下 MSW）志望者の不足が不安視されている。社会福祉専門職の育成も喫緊の課題で、現状学生の多くは社会福祉職に興味を持っていない。メディア化されることでその職種への興味関心が向上する可能性もあり、2021 年に発表された「ビターエンドロール」という MSW を描いた漫画作品から MSW の職業像を考察した。

MSW が支援の中で使う社会福祉サービスと社会資源、業務指針、倫理綱領に書かれている価値に基づいた職業像を丁寧に描写しており、それを漫画という形でクライアントを支える職種として分かりやすく描かれていた。また単なる職業紹介ではなく、ストーリーのある漫画作品であるため、主人公たちの人物像やその物語の中での葛藤などから、さらに職業像を膨らませることに繋がっていく。

MSW とその専門職団体はこのような漫画やメディアの題材を積極的に活用することで MSW を含む社会福祉専門職の重要性をアピールし、社会的な関心を喚起する取り組みを行っていくようなソーシャルアクションを展開することが必要である。それが MSW の社会的認知の向上や将来的な社会の変化をもたらす可能性につながると考える。

I 研究の背景

筆者はこれまで大学病院、総合病院で精神保健福祉士として、また医療ソーシャルワーカー（以下 MSW）として長年働いてきた。医療現場において社会福祉の視点を持った専門職は非常に重要であると考えられる。しかし筆者が耳にするのは年々「MSW の成り手が少なくなって求人を出しても昔に比べて人が来なくなった」という話が多く、MSW の成り手が少なくなっていることが不安視されている。もちろ

ん少子高齢化の問題もあるが、MSW だけでなく、社会福祉専門職に対して「きつい」「大変」といったマイナスイメージが強くあることはこれまでも言われてきている。

社会福祉専門職、特にソーシャルワーカーの不足に関する問題について、三橋（2012:163）は「ソーシャルワーカーという職業に従事する者が少ないことは、国民の生活の質の低下に結びついているのである」と指摘している。現在、日本社会は少子高齢化、無縁社会、格差社会、子どもの相対的貧困率の上昇、教育問題、虐待、障害者の地域生活支援、さらには幅広い世代にわたるメンタルヘルスの課題など、多様な複雑な社会問題に直面しており、これらの問題に対処するためには、幅広い専門知識と対応力を持つ社会福祉専門職の存在が不可欠である。そのため、社会福祉専門職の育成は喫緊の課題とされている。

しかし、現実に社会福祉専門職への関心が低い傾向が見られる。兵庫県社会福祉協議会の調査（2016：11）によれば、約 80% の高校生が将来社会福祉の職業には興味を持っておらず、その背後には給与や労働条件の問題が挙げられている。一方で、20% の学生が少なからず福祉に興味を持っていることも確認された。しかし、実際に社会福祉専門職を志し、そのための大学や専門学校に進学する学生は限られており、社会福祉を学べる養成校は年々減少している。前述の三橋（2012：165）の大学生への調査でも「社会福祉＝介護」といったイメージが強く、『ソーシャルワーカー』という対人援助職の存在は大学の授業の中で知った者が約 70% となっている。これは社会福祉に対する理解の不足だけでなく、その職業の多様性や範囲が広く知られていないことを示唆している。

この件について先行研究では横山（2003：90）が新しい対人援助専門職の職業像が社会的に認知されることで、ティーンエイジャーが将来の職業選択においてその職種を意識する可能性が高まると述べている。「例えば、保育士、教師、看護師、医師といった職業については実生活の中で直接接する経験を持ちやすく、職

業イメージを抱きやすいし、実生活の中で直面する機会が一般的に多いといえない弁護士についてもこれまで数々の映画やテレビドラマを通じてその仕事ぶりが描かれているため、相当イメージ作りが可能である」とも述べており、ドラマなどのメディアで職業を取り上げることで、職業への関心が高まり、将来の専門職への志望者を増やす効果が期待される。

また精神保健福祉士について柏木（2022：234）が社会的に有意義で人の役に立つ仕事をしたいと考えている人がソーシャルワーカーという仕事を選択しないことについて「メディアを媒介にしてわかりやすく仕事の中身を伝え、若年層にロールモデルとして選んでもらうには効果的ではないであろうか」と投げかけているが、これはMSWにも同じことが言える。

実際にメディア化されることによって将来なりたい職業につながる事例はこれまでも存在する。筆者が大学病院で勤めていた時に毎週のように実習に来る医学部の学生に「なぜ医師を目指すのか」聞いたときに手塚治虫が描いた「ブラックジャック」を読み、医師を目指した学生は非常に多かった。実際に医師転職ドットコムの現役医師が選ぶ「好きな医療漫画」ランキングでも1位に選ばれており、これを読んで医師を目指した人があるなどフィクション作品ながら影響力が高い。また中高生向けに医療を目指すきっかけにと、全国各地の医療機関と医療機器メーカーが共同で「ブラックジャックセミナー」と称し、「医師」ではなく「ブラックジャック」という漫画のタイトルを冠した仕事体験のセミナーを継続して開催しており、志望者拡大のきっかけにもつながっている^{注1)}。また潜水士を描いた佐藤秀峰の「海猿」は映画化・ドラマ化によって海上保安庁の受験者が上昇したという逸話がある^{注2)}。他にも様々な職種で同様のことが起きており、漫画やドラマ化によって起る影響は少なくない。もちろんすべての職種がメディア化によって増加するとは限らない。しかし社会福祉専門職においてフィクション作品であってもメディアでその職種を取り上げることで関心を高めていくきっかけにつながる可能性は否定できない。

社会福祉専門職の中でもMSWは医療現場における福祉職として古くからメディア化されている。1984年、漫画「M.S.W. メディカル・ソーシャルワーカー」が連載され、またMSWを描いたテレビドラマ「天使

のように生きてみたい」が1992年ゴールデンタイムで放映されるなど、医療の中にいる社会福祉専門職としてメディアで取り上げられてきている。2000年代には複数の漫画作品でMSWが主人公として描かれてきた。他にも様々な社会福祉専門職が描かれているが、複数の作品で主人公として雑誌連載作品として扱われたものはMSWが多い。しかしまだMSWの職業像は広く認知されておらず、MSW＝社会福祉専門職というイメージにも結び付いていない現状であると言える。

このようなソーシャルワーカーのメディア化された作品については横山や田中が先行研究として発表しており、テレビドラマや小説、漫画に描かれているソーシャルワーカー（特にMSW）について将来の進路選択を考える若者が手にとりやすく、対人援助職の貢献や魅力を伝えるのに影響力があることを述べている^{注3)}。

その中で、2021年に発表された漫画作品「ビターエンドロール」はMSWの専門性や職業像を詳細に描写した作品として注目されている。この作品は社会福祉制度やサービスの導入を丁寧に描き、専門職団体の大阪医療ソーシャルワーカー協会、大分県医療ソーシャルワーカー協会などが積極的に取り上げており、このような漫画を通じた情報発信が、MSWという職業への関心を高め、将来の専門職志望者を増やす一助になる可能性がある。

そこで本研究では漫画作品「ビターエンドロール」を通じて描かれるMSWの専門性や職業像を分析し、MSWが将来の福祉を担う学生に選ばれるために必要な要素や課題について考察し、報告する。

Ⅱ MSWを主人公としたフィクション作品のこれまで

田中（2008：32）は「これまでの社会福祉学研究の中では、研究者の間でソーシャルワークの理論や役割について論じられることはあっても、人間としてのソーシャルワーカー個人に焦点を当てた研究はほとんどなかった」と論じている。これに対し、医師や看護師はその業績だけでなく、どのような人物だったのかを知る機会となる伝記や小説、ドラマ、漫画などが数多く存在する。MSWに関して浅賀ふさなど先駆者の名前は知られているが、その功績や人物像についての

情報は限られており、伝記や小説のような形で語られたものではない。また一部の文献で若手のソーシャルワーカーの考えや生活史に焦点を当てたものがあるが、ソーシャルワーカー同士の共感を得られるものの、一般の人がソーシャルワーカーの職業像全般について理解を深めるには不十分と言える。

漫画やドラマなどのフィクション作品は主人公の視点を通してその職業の実際的な業務やその職業内での葛藤が描かれることで、感情が揺さぶられることがあって初めて一般の人の共感を呼ぶ可能性が高くなる。こうしたフィクション作品の中でソーシャルワーカーが描かれることで一般の人が認知するきっかけになると考える。

過去から現在にかけて MSW を主人公にしたフィクション作品は、漫画、映像、小説の形で存在している（表 1）。

漫画「M.S.W メディカルソーシャルワーカー」（冨木奈緒、小学館）は 3 年目の MSW が院内で起きるさまざまな問題に対応する姿を描写している。その後も「MSW 相談室、ナツミです。」（角川書店）や「いとしのタンバリン」（小学館）、また「相談室の星 医療ソーシャルワーカーの日誌より」（双葉社）でも MSW を主人公に据えて医療機関の内外で巻き起こるケースに奮闘する姿を描いている。これらの作品はいずれもドラマ化などされることはなく、単行本として

1 巻から 3 巻の範囲で刊行されている。

一方テレビドラマとしてのフィクション作品では 1992 年の TBS 系列「天使のように生きてみたい」があるが、MSW としての成長を描きながら後半では恋愛要素が強調されていた。小説では山田宗樹が「八雲にて」「人は、永遠に輝く星にはなれない」（いずれも小学館）で MSW を取り上げ、MSW の業務の複雑さを描写している。

主人公として描かれているもの以外でも漫画やテレビドラマに MSW が登場している。古くはテレビドラマ「振り返れば奴がいる」（フジテレビ：1993）では院内で寝泊まりしている MSW が登場していた。「コウノドリ」（講談社）では漫画連載当初から患者の経済問題などを支える重要な役割として描かれており、ドラマ化の際も俳優の江口のり子氏が好演していた。他にも漫画では「もものこと 愛犬と老人の最後の日々」（山本おさむ小学館：2023）、テレビドラマ「天国と地獄～サイコな 2 人～」（TBS：2021）にも登場しており、MSW は医療機関の中で生活上の問題や患者、医療機関の人間関係など、さまざまな医療情報を知る人物として描かれている。

横山（2012：226）はこれらのフィクション作品について「テレビドラマと漫画で MSW が取り上げられた例であったが、それらに共通するのは、ビジュアル作品ゆえの限界である。幅広い年齢層の人々に具体的

表 1 MSW を主人公にしたフィクション作品

| 発表年 | タイトル | 作品概要 |
|-----------|--------------------------|---|
| 漫画 | | |
| 1984年 | 「M.S.W.メディカルソーシャルワーカー」 | 冨木奈緒作レディースコミック「For Lady」に連載された作品。3年目の女性MSWが主人公。母親が入院したことによって一人になってしまった子どもを自宅に引きとって面倒を見るなどの描写もあった。 |
| 2008年 | 「MSW 相談室、ナツミです。」 | さくらももこ（原作）大倉かおり（画）宮内佳代子（監修）角川「コミックチャージ」連載。2年目の若手MSWが主人公。先輩MSWとともにさまざまなケースに取り組む姿を描く。コミックチャージ廃刊とともに終了。 |
| 2011年 | 「いとしのタンバリン」 | くじらいく子作小学館「ビックコミックオリジナル増刊号」連載。元脳外科医がMSWとなり、さまざまな患者の問題に取り組む。脳外科医からMSWに転職した経緯などの伏線は回収されないまま終了。 |
| 2015年 | 「相談室の星 医療ソーシャルワーカーの日誌より」 | 阪口みく作双葉社「JOUR素敵な主婦たち」連載。星まどかが主人公。4年目。「本格医療ミステリードラマ」となっており、MSWが患者の謎（問題）を紐解いていく形でストーリーが展開していく。 |
| 2021年 | 「ビターエンドロール」 | 佐倉旬作「月刊アフタヌーン」連載。映画好きですぐに号泣する1年目のMSWが主人公。先輩MSWや他職種と連携しながら患者の問題に寄り添い、悩みながら立ち向かう姿を描いている。 |
| 映像 | | |
| 1992年 | 「天使のように生きてみたい」 | 田中美奈子、中嶋朋子、石黒賢出演。脚本 佐伯俊道。偶然出会ったMSWに興味を持った主人公がMSW講座を受けMSWになるという展開。「医者とは病気、MSWは人を救う」というセリフが物議を呼んだ。同年、佐伯俊道により小説化された同名の単行本が徳間書店より刊行 |
| 小説 | | |
| 2008年 | 『八雲にて』 | 「嫌われ松子の一生」のスピノフとして書かれたもので風俗店店長赤木の晩年に関わったMSWとの面接の中で松子への思いを話すという作品。総合病院で一人戦場の男性MSWが面接を通した関係づくりをしていく姿が描かれている。 |
| 2008年 | 『人は、永遠に輝く星にはなれない』 | 総合病院で勤める女性MSWが主人公で一人職場ながら多くのケースで多忙になっていることを描く。入院患者の戦友を探し出し、会わせるといったケースなど同時並行で行われているケースを描いている。 |

（筆者調べにより作成）

なイメージを手軽に届けられるという大きな長所がある一方、限られた時間や誌面の中で MSW の扱う複雑な問題や解決へのプロセスを、起承転結のストーリー展開で見せていくには大幅に簡略化したり省略したりするなど、多くの制約を伴う」と指摘している。MSW の業務は信頼関係の構築や適切な社会資源の紹介、その利用を含むため単純なストーリー展開では全容を描くことが難しく、リアリティが失われる可能性がある。しかし漫画やドラマであれば一般の読者・視聴者に伝えるためには魅力的なストーリーとインパクトのある展開が必要不可欠である。これまでの MSW 作品でも連載時に注目されることはあったが、作品の社会的な人気や MSW の周知につながったかどうかについてはそれぞれの作品についての検証が必要である。そのため本論では割愛する。

Ⅲ ビターエンドロールにおける MSW 像

「ビターエンドロール」は佐倉旬によって描かれた漫画で、2021 年から 2023 年まで講談社の月刊アフタヌーンで連載されていた。この作品は新人 MSW の犬飼賢児を主人公に据え、医療福祉相談室の 3 人の MSW と医師、看護師、理学療法士などの他の職種が協力して患者の問題を解決する物語である（図 1）。

物語は架空の大学病院である清菖医療大学竜巳病院医療福祉相談室を舞台に展開される。第 1 話で、主人公 MSW が「患者さんの病気やケガの後遺症から生じ

る問題や不安に寄り添い、社会福祉の立場から患者さんを支援する」という MSW の役割について説明し、看護師との対話を通じて、MSW が患者の日常生活や家族、仕事に関わる問題に取り組む存在であることが読者にも分かるように伝えられている（佐倉：2022 図 2 参照）。

物語の中で、主人公は各話ごとに異なる患者（クライアント）と接し、彼らが抱える問題を明らかにしていく役割を果たす。必要な社会福祉サービスや社会資源について紹介し、クライアントがその利用にためらいや不安を感じる場合には寄り添いながら解決へ導くプロセスが描かれている。主人公は先輩 MSW の協力を得ながら、患者と共に問題解決に取り組んでいく。

この漫画は全 13 話で全 3 巻にまとめられており、連載開始当初から現場の MSW からは注目されていた。MSW の専門職団体が作者と連携してオンラインイベントを開催し、作品を通じて MSW の職業を広く知らせる活動が行われた。そのひとつ、特定非営利活動法人大阪医療ソーシャルワーカー協会は 2022 年にこの漫画を活用して、高校生向けのパンフレットを作成し、大阪府下の高校に 1、2 巻を送付するなど、MSW の職種の認知度を広めるための取り組みを展開している（佐倉、2022 図 3 参照）。

大阪医療ソーシャルワーカー協会がこの企画の担当をした理事によると、過去には 2018 年にチーム医療推進協会が制作した MSW の紹介漫画とリーフレットを大阪府内の高校へ送付したが、反応が限定的で、「難



図 1 ビターエンドロール単行本 1 巻表紙
(ビターエンドロール第 1 巻より引用)



図 2 ビターエンドロール単行本 1 巻より
(ビターエンドロール第 1 巻 p14 より引用)



図3 ビターエンドロール単行本3巻 本体表紙
(ビターエンドロール第3巻本体表紙より引用)

しすぎる」との声もあったとのことだった。この経験を踏まえて新たなアプローチとして「ビターエンドロール」を活用することに決めたというのである。

この漫画はMSWという仕事の説明をするのではなく、MSWを題材にしたストーリーが展開され、その中で患者や家族、他職種などの登場人物が活躍し、その人物像が具体的に描写されていく。そこにはMSW自身の背景やエピソードも織り交ぜられ、読者の共感を引き起こし、興味を引く役割を果たしている。漫画は単なる情報の伝達以上に読者に対して感情移入や興味を喚起する効果があると考えられる。物語を通じて、職業の背後にある人間的な側面や複雑さが浮き彫りにされることで、職業そのものへの理解を深めることにつながっている。つまり「ビターエンドロール」は、MSWの役割や業務を、ストーリーを通じて伝える手段として有効に活用され、登場人物の人物像やその悩みや背景がMSWへの共感や理解を深める役割を担っていると言える。物語は各話ごとに異なるクライアントの問題解決過程を通じて、MSWの多面的なスキルと専門知識を提示し、職業の複雑さや重要性を読者に伝えている。漫画作品だからこそのセリフ、漫画の持つビジュアルの力によってMSWの職業に興味を持つ人々や一般の人々に対して、専門職の役割を魅力的で分かりやすい形で伝えている。

それでは実際に描かれているMSWの業務についてはどうなのか。登場人物の人物像が魅力的で共感されるものであっても、そこに描かれるMSWの業務が現実とかけ離れたものであれば、MSW像が誤った形で認識されてしまうことになる。実際に「ビターエンド

ロール」で描かれるMSW像についてさらに深めてみたい。

IV 「ビターエンドロール」に描かれている MSW像の研究

1. 目的

本章では、漫画作品「ビターエンドロール」に描かれているMSWの専門性や職業像について分析する。MSWの仕事内容についてはMSWが勤めている医療機関によって様々なものがある。しかしクライアントが抱える経済的・心理・社会的問題の解決、調整を支援するにあたっては、その方法の一つとして、社会福祉サービス・社会資源とクライアントをつないでいくことが非常に重要な業務となる。このような支援を行うための最も標準的なMSW像となっているものが「医療ソーシャルワーカー業務指針(2002)」(以下業務指針)であり、MSWがその業務を行うにあたって遵守していくべき倫理や価値、考え方について示されているものが「医療ソーシャルワーカー倫理綱領(2022)」(以下倫理綱領)である。そのため、分析にあたっては、どのような社会福祉サービス・社会資源を活用しているのか調べ、その上で業務指針に則した形で活用されているのか、またクライアントや家族への関わり方として倫理綱領のなかでも特に「医療ソーシャルワーカー行動基準」に書かれている内容に則した形で関わっているのか比較検討する。この漫画で描かれているMSW像が極端な解釈や本来のMSW像とかけ離れた形で描かれているのではなく、かつ、分かりやすく描かれていれば、この作品を通じて一般の読者や将来福祉職を志す学生にMSWの職業像を認知してもらいやすくなるを考える。そのうえで、さらに漫画に描かれている職業像が分かりやすく伝わる要素が分かれば、それによってMSW自身がMSWについて説明する際にもその職業像を身近に感じてもらうことができ、福祉職を志す学生にとっては将来の職業選択の一つとして検討されることにも繋がる。そしてこの作品を通して描かれるMSW像から専門職団体やMSWが将来選択されるための取り組むべき課題についても見えてくると考える。

2. 方法

本研究では、漫画作品「ビターエンドロール」の全13話を対象とする。その中でMSWが支援の際に使用する社会福祉サービス・社会資源にどのようなものが使われているかを調べ、検討する。また漫画の中のMSWの行動や発言に着目し、特に、支援活動を行う際に用いているセリフや表現から、MSWの専門性を示す要素について、筆者が業務指針にある業務にどのように当てはまっているか、また倫理綱領のどの部分に当てはまるのか検討していく。「ビターエンドロール」に描かれるMSW像が現実のMSWと近い専門職像を示していれば、それは読者にMSWという職種を理解してもらいやすくなる可能性も高くなると考える。

3. 倫理的配慮

本研究は、漫画作品「ビターエンドロール」においてMSWの描写を基にMSWの職業像を検討するものであり、作品に対する批判的な意図を持つものではない。漫画作品はエンターテインメントの一環として制作されたものであり、作品のエンターテインメント性に対して評価や批判を行うものではないことを述べておく。なお、本論文内容に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

4. 結果

(1) 社会福祉サービス・社会資源からみるMSWの職業像

「ビターエンドロール」では、患者の問題解決のために社会福祉サービスや社会資源が利用される場面が描かれている。これにより、読者にMSWが社会福祉サービスや社会資源を使う職業であることを理解してもらえる。そのためこれらを使う描写はMSWを知ってもらう上で重要な役割を果たしている。各話ごとに患者の傷病や状況に合わせて必要な社会福祉サービスや社会資源があり、作中に出てくるものについては表2にまとめている。

しかし、社会福祉サービスや社会資源の利用だけでは患者の問題が解決するわけではない。患者の状況は個別で異なり、問題は複雑化しており、この表に示された社会福祉サービスや社会資源は、あくまでも問題解決のための手段の一部として使用されている。

例えば、第1話では、高額療養費制度についての説明だけでなく、そのあとに患者・家族の不安や気になることを聞き、丁寧に対応するMSWの姿を描き、単に社会資源の紹介をして終わる職種ではないことを示している。他のエピソードでも、患者たちは社会資源を使うよりも一人で解決しようとする場面があるが、MSWはそれを安易に「自己決定」と捉えず、患者と共に問題に向き合い、寄り添う姿勢が描かれている。

表2 ビターエンドロール作中の患者の病名と使われた社会福祉サービスと社会資源

| 話 | 病名 | 作中で使われた社会資源・サービスなど | 業務指針にある業務範囲 |
|--------------|---|---|--|
| 第1話 | 胃がん くも膜下出血/左片麻痺と軽度の左半側空間無視/相貌失認など高次脳機能障害 | 高額療養費制度、限度額適応認定証 職場訪問（復職支援）、産業医との連携 回復期病院への転院 | ・療養中の心理・社会的問題の解決、調整援助 ・社会復帰援助 ・経済的問題の解決、調整援助 ・受診・受療援助 |
| 第2話 | アルコール依存症（急性アルコール中毒、急性肺炎） | アルコール依存症スクリーニングテスト、断酒会紹介、ショートステイ紹介、断酒会への参加同行、家族会の紹介、育児教室の紹介 | ・療養中の心理・社会的問題の解決、調整援助 ・社会復帰援助 |
| 第3話 | 多発性骨髄腫 | 生活保護申請、無料低額診療、退院前訪問指導 | ・療養中の心理・社会的問題の解決、調整援助 ・受診・受療援助 ・経済的問題の解決、調整援助 |
| 第4話 | 潰瘍性大腸炎 | 食事の注意事項の紹介、就労支援・障害者雇用利用について、（離院患者の捜索） | ・療養中の心理・社会的問題の解決、調整援助 ・社会復帰援助 |
| 第5話 | 乳がん | 傷病手当、家族心理教育、緩和ケアチームとしての介入 | ・療養中の心理・社会的問題の解決、調整援助 |
| 第6話 第7話 | 腰椎圧迫骨折/認知症（ヤングケアラー） | 介護保険申請、介護サービスの導入、学校との連携、ヤングケアラーの勉強会 | ・療養中の心理・社会的問題の解決、調整援助 ・退院援助①② ・受診・受療援助 ・地域活動 |
| 第8話 第9話 | 認知症 | 介護保険サービス導入、ホームヘルパー導入 | ・療養中の心理・社会的問題の解決、調整援助 ・受診・受療援助 |
| 第10話 第11話 | 大腿骨頭部骨折（セルフネグレクト）/蜂窩織炎 | 休業補償（労災）、退院日程の調整、ゴミ屋敷の清掃（社会福祉協議会との連携）（退院前訪問指導）、猫の里親探し | ・療養中の心理・社会的問題の解決、調整援助 ・退院援助 ・受診・受療援助 ・経済的問題の解決、調整援助 |
| 第12話 第13話 | 胃潰瘍/胃がん（ホームレス）/識字障害 | 生活保護申請、退院後の生活保護再申請支援 | ・療養中の心理・社会的問題の解決、調整援助 ・受診・受療援助②④ ・経済的問題の解決、調整援助 |

（ビターエンドロール全13話と医療ソーシャルワーカー業務指針より筆者作成）

これらによって、MSW の業務は社会資源の利用だけに留まらず、患者の心理的な問題や社会的な困難に対処する幅広いスキルが求められることが示されている。

(2) ビターエンドロールにおける MSW の業務の検討

表2では「作中で使われた社会資源・サービスなど」に加え、その援助が業務指針に書かれてある6つの「業務範囲」について合致すると思われる項目について表にしている。

さらに漫画で描かれる MSW の業務が現実に業務指針にある「業務範囲」で示されている業務であるかどうか具体的に検討してみた。

業務範囲の①～⑥に当てはまる漫画内の業務と主人公たちのセリフの中から、特に MSW の職業像にかかわると考えられる部分を、そしてその業務が正しく行われているかについて倫理綱領との関連についても検討してみた。それらを表3に表している。倫理綱領の中でも今回特に「医療ソーシャルワーカー行動基準」のなかの「クライアントに対する倫理責任」の部分について着目して検討し、その内容について表4にまとめた。

① 療養中の心理的・社会的問題の解決、調整援助

MSW は患者との対話を通じて、心理的な問題や家

族関係にアプローチしていく。漫画本編で最も多くの時間を取るのがこの項目にあたることであり、すべての話で行われている。ここでは筆者が特徴的と思われるものについて挙げる。

例えば、第5話では、クライアントが乳がんで悩み、立ち直ることに焦りを感じている場面で、主人公 MSW は以下のように話す。

「何もしなくていいんですよ……？ ありのままなんて受け入れられなくてもいい。それより、今あなたが傷ついている事実のほうが大切なんです」

このセリフによって、MSW はクライアントの心情を、倫理綱領に書かれている「3. 受容」することによって、療養中の心理的な負担を軽減し、自分を追い詰めなくてもいいことを促している。特にクライアントの行動の持つ意味や原因・背景を理解することによって、クライアントが抱える辛さや家族への想いを吐露することにも繋がっている。実際に MSW としてこのような状況を感じとり、介入をするにはある程度の経験と力量が必要だが、療養中の心理的・社会的問題の解決として非常に重要なものといえる。

一方、第7話で主人公 MSW がヤングケアラーの子どもの負担を軽減するためにクライアントや家族と相談せずに支援計画を立てようとしたときに、先輩 MSW が「患者と家族の意見が反映されていない支援計画なんて成立する以前の問題。誰がお金払うと思っ

表3 業務指針とビターエンドロールでのセリフからみえる MSW の専門性

| 業務指針 | 話数 | 漫画内のセリフ | MSW の専門性(倫理綱領・行動基準にもとづくもの) |
|------------------------|------|---|---|
| ①療養中の心理的・社会的問題の解決、調整援助 | 第5話 | 「何もしなくていいんですよ……？ ありのままなんて受け入れられなくてもいい。それより、今あなたが傷ついている事実のほうが大切なんです」 | 3. 受容 |
| | 第7話 | 「患者と家族の意見が反映されていない支援計画なんて成立する以前の問題。誰がお金払うと思ってんだ？ 支援を受けるのもそれに金を払うのも患者とその家族だろうが」 | 5. クライアントの自己決定の尊重 7. クライアントの意思決定への対応 |
| ②退院援助 | 第3話 | 「それを五郎さんに伝えましょう。病気になったのは吾郎さんですが……あなたと美花さんの気持ちも大切なんです」 | 2. クライアントの利益の最優先 |
| | 第7話 | 「仕方ないとか自分が頑張るしかないとか、それは本当の解決じゃないんだよ。自分が壊れないために人に助けて貰うのは大事な事なんだ。誰かの優しさや一生懸命さに寄りかかって無理をして家族を成り立たせるのはだめなんだよ(中略)そうならないために僕達がいるんだ」 | 11. 権利擁護 7. クライアントの意思決定への対応 |
| ③社会復帰援助 | 第1話 | 「本人がいないところで本人の話を決めるのはどうかと思います」 | 6. 参加への促進 |
| | 第13話 | 「偽善でもなんでもいい。僕のすることが要らなかったら突っぱねればいい。的外れなら笑えばいい。選ぶのはあなただ」 | 6. 参加への促進 |
| | 第13話 | 「支援はあなたが自分の人生を『選ぶ』と感じるためのものです。僕はあなたが未来を選ぶようになってほしい」 | 5. クライアントの自己決定の尊重 |
| ④受診受療援助 | 第8話 | 「認知症は『暮らしの障害』とも言う……重要なのは日常生活に支障があるかどうかなんです」「もし今までなかったことで困っているなら検査を受けて認知症に限らず今の自分の身体の状態を知ることで分かる病気や楽になる気持ちもあるかもしれません」 | 6. 参加への促進 7. クライアントの意思決定への対応 |
| | 第2話 | 「僕はずっと知識をつけて榎橋さんに依存症の治療をさせるのが自分の仕事だと思ってました。でも違った。できることはお手伝いだけ。僕自惚れてたんです。本当に榎橋さんを治せるのは榎橋さんだけです」 | 3. 受容 6. 参加の促進 |
| ⑤経済的問題の解決、調整援助 | 第1話 | 「お金って大事ですよ！生きてるんですから!!」 | 2. クライアントの利益の最優先 |
| | 第3話 | 「気長に話し合いしかないですね。患者本人の意思を尊重するのがMSWですから」 | 5. クライアントの自己決定の尊重 |
| ⑥地域活動 | | 該当するセリフはない | |

(ビターエンドロール1～3巻と医療ソーシャルワーカー業務指針と倫理綱領より筆者作成)

表 4 医療ソーシャルワーカー行動基準クライアントに対する倫理責任について

| 医療 ソーシャル ワーカー 行動基準 | クライアントに対する倫理責任 | 主な内容 |
|-----------------------------|--------------------|--|
| | 1, クライアントに対する倫理責任 | MSWは、クライアント・ワーカー専門的援助関係を築き、その関係を自らの利益のために利用しない。 |
| | 2, クライアントの利益の最優先 | MSWは、業務の遂行に際して、専門的立場を私的に利用せず、クライアントの意思を尊重し、その利益の最優先を基本にする。 |
| | 3, 受容 | MSWは、クライアントの多様な背景を理解し、先入観・偏見を排し、クライアントをあるがままに受容する。 |
| | 4, 説明責任 | MSWは、クライアントが必要とする情報について説明し、クライアントが説明内容を理解しているかどうかを確認する。 |
| | 5, クライアントの自己決定の尊重 | MSWは、クライアントが自己決定の権利を有する存在であると認識する。 |
| | 6, 参加の促進 | MSWは、クライアントの自尊心と有する力を高めるよう働きかけ、クライアントの完全な関与と参加を促進する。 |
| | 7, クライアントの意思決定への対応 | MSWは、クライアント自らが意思決定の権利を有すると認識できるよう、最善の方法を用いる。 |
| | 8, プライバシーの尊重と秘密の保持 | MSWは、クライアントのプライバシーを尊重し、秘密を保持する。 |
| | 9, 記録の開示 | MSWは、クライアントから開示の要求があった場合は、原則として記録を開示する。 |
| | 10, 差別や虐待の禁止 | MSWは、クライアントに対し、いかなる差別・虐待も行わない。 |
| | 11, 権利擁護 | MSWは、クライアントの権利を擁護するために、積極的かつ最善の方法を用いて、その権利の行使を促進する。 |
| | 12, 情報処理技術の適切な使用 | MSWは、クライアントの権利を擁護するために、情報リテラシーを高める必要があることを自覚する。 |

(医療ソーシャルワーカー倫理綱領より筆者作成)

てんだ？ 支援を受けるのもそれに金を払うのも患者とその家族だろうが」とMSWの一方的な思いで支援をしないように指導している。これは倫理綱領における「5, クライアントの自己決定の尊重」「7, クライアントの意思決定への対応」にかかる問題を表現していると考ええる。心理・社会的問題の解決において、MSWの独りよがりな支援にならないためにはクライアントの自己決定を尊重し、意思決定できるような関わりが重要と考える。特にこのエピソードではMSWの思いが強くなりすぎてクライアント（この場合家族も含め）の意思決定のための権利が損なわれてしまう危険性について描かれており、MSWの思いだけで支援計画を立てることの危険性を示している。

② 退院援助

退院援助は一般的にMSWの業務の中でもとても多くのウェイトを占めている業務である。漫画の中でも退院に向けた相談が中心的な要素となっている。MSWは退院時期の確定や社会資源の活用など様々な状況を考慮し退院に向けての支援を行う。

第3話「がんと生活保護」では無保険のがん患者の生活保護申請に関する問題が描かれており、退院後の生活も踏まえ、クライアントの自宅売却の必要性が浮かび上がる。クライアントは申請を拒否し主人公

MSWはクライアントとその家族との対話を通じてクライアントが拒否する理由を探っていく。その過程で亡くなった妻や家族との思い出と息子へのうしろめたさなどで自宅を手放すことができないクライアントの想いを知る。息子たちは何でもいいから助かってほしいと願っており、主人公MSWはその間に介入し、「それを五郎さんに伝えましょう。病気になったのは吾郎さんですが……あなたと美花さんの気持ちも大切なんです」と伝える。これは倫理綱領における「2, クライアントの利益の最優先」と考えられる。一見クライアントとその関係者の利害が異なっているようにみえているが家族間の思いの行き違いを相互理解することでクライアントの利益となることにつながっていると考えることができる。

第7話でヤングケアラーであることをあきらめている中学生に対して、「仕方ないとか自分が頑張るしかないとか、それは本当の解決じゃないんだよ。自分が壊れないために人に助けて貰うのは大事な事なんだ。誰かの優しさや一生懸命さに寄りかかって無理をして家族を成り立たせるのはだめなんだよ（中略）そうならないために僕達がいるんだ」と主人公MSWは、倫理綱領の「11, 権利擁護」を意識し、この中学生に自分にも自分を大事にする権利があること、「7, クライアントの意思決定への対応」として自らの意思決定の

権利を有していることを理解してもらい、退院を考えてもらう際に家族やクライアントを一人にさせないように支援を行っていく。

③ 社会復帰援助

社会復帰援助ではクライアントの社会復帰に関する不安や傷病によってこれまでのようにできなくなった自己否定感に寄り添うことが必要と考える。職場との調整などもこれに加わり、クライアントのみに関わるということができないことに難しさがあると考ええる。

第1話では、高次脳機能障害のクライアントの復職についての関わりが焦点となり、職場との調整を行う。

職場から異動を提示されたことについて主人公 MSW が「本人がいないところで本人の話を決めるのはどうかと思います」と伝え、クライアント本人抜きで決定されることに異議を唱える。これは倫理綱領の「6, 参加への促進」を意識したものであり、クライアントが自らの人生に影響を及ぼす決定への関与や参加から排除される可能性を認識したものだと考えられる。さらに将来の従業員の健康状態に対する提案や対応策についてなど職場の人間関係に関する調整も行った。

第13話では生活保護を受けることを拒否し、ホームレス生活を選ぼうとするクライアントへの対応が描かれていた。主人公 MSW は「偽善でもなんでもいい。僕のすることが要らなかったら突っぱねればいい。的外れなら笑えばいい。選ぶのはあなただ」と対立する言い方ではあるもののクライアントの自尊心と有する力を高めるために参加を促している。これも「6, 参加への促進」であると考えることができる。また「支援はあなたが自分の人生を『選べる』とを感じるためのものです。僕はあなたが未来を選べるようになってほしい」と伝えるのは「5, クライアントの自己決定の尊重」をしていると捉えることもできる。倫理綱領を意識した形でクライアントに関わることで、社会復帰援助においても患者の自己決定を尊重し、それらの選択肢を患者が適切に判断できるように支援している。

④ 受診・受療援助

受診・受療援助では患者やその家族などの生活や傷病の状況に適した受診や治療に関するサポートを行うことが必要で、MSW は適切な情報提供を行い、患者

の不安を軽減することがその役割となる。第8話では、母親に認知症検査を受けさせようと、息子が嘘をついて連れてくる場面で、主人公 MSW は「嘘は良くないです」と息子に伝える。その上でクライアントには先輩 MSW が「認知症は『暮らしの障害』とも言う……重要なのは日常生活に支障があるかどうかなんです」「もし今までなかったことで困っているなら検査を受けて認知症に限らず今の自分の身体の状態を知ることでも分かる病気や楽になる気持ちもあるかもしれません」と検査の目的は認知症を発見するためのものだけではないことを伝え、安心させている。これは受診することを自らの意志で行えるように促すことであり、倫理綱領の「6, 参加への促進」につながる。また第2話ではアルコール依存症患者のクライアントに主人公 MSW が「僕はずっと知識をつけて棚橋さんに依存症の治療をさせるのが自分の仕事だと思ってました。でも違った。できることはお手伝いだけ。僕自惚れてたんです。本当に棚橋さんを治せるのは棚橋さんだけなんです」と伝える。クライアントの行動に対して、その行動の持つ意味や原因・背景を理解する「3, 受容」を行っている。それをクライアント自身に伝えることでアルコール依存症に向き合うきっかけを作っており、「6, 参加の促進」にもつなげている。

⑤ 経済的問題の解決、調整援助

これも MSW の業務の中でも非常に多い支援の一つといえる。経済的な問題に対するサポートでは、MSW が患者や家族の立場を尊重しつつ、解決策を見つける支援を行っている。例えば第5話では傷病手当、第10話で労災の休業補償の手続きについての相談場面が描かれている。また、第1話の高額療養費制度の説明の際に、家族がお金のことで後ろめたく感じているのを察し、「お金って大事ですよ！生きてるんですから！！」とあえて気まずくさせないように話すことで気を遣わせないように促している。これは「2, クライアントの利益の最優先」につながる。第3話で生活保護申請を拒否するクライアントに不安を感じる家族に対しても、「気長に話し合いしかないですね。患者本人の意思を尊重するのが MSW ですから」と話し、クライアントとの面談を繰り返していく姿が描かれている。これは「5, クライアントの自己決定の尊重」であるが、自己決定をしっかりと尊重するからこそ一時の感

情で決めるのではなく、上述のような家族の思いも伝え、総合的に考えていくことができるようになる。第13話でも生活保護申請を嫌がるクライアントの話もあり、経済的問題がクライアントや家族にとって大きな枷になっていることを示している。

⑥ 地域活動

MSW は地域の保健医療福祉システムの発展に貢献し、患者のニーズに合ったサービスが提供されるよう、関係機関と連携していく。その中で地域の患者会や家族会、ボランティアの育成や支援、高齢者や精神障害者の方が地域で安心して暮らしていけるように、地域の理解を求め、普及を進めることが業務になっている。漫画中では、これに適応しているセリフはないが、第7話では主人公MSWが担任の先生に「ヤングケアラーの勉強したいとかで一回会いたい」といわれ、中学校に行くことを検討している様子が描かれ、地域での活動が展開される予兆として示されている。

その他にも MSW の業務指針のなかには別項目で「他の保健医療スタッフ及び地域の関係機関との連携」についても明記されており、これについても MSW の業務の一つとして描かれている。特に第10・11話の「ゴミ屋敷」エピソードでは、主人公MSWと他の医療スタッフとの連携シーンが描かれている。このエピソードでは、MSW がゴミ屋敷の掃除に向かう際に、担当理学療法士（PT）や研修医と共同で行動しているが、その後ゴミ屋敷についての見解の相違が生じる場で、主人公MSWは研修医に自分の考えを伝える。「考え方だけじゃない、僕と鯨井先生は職種も立場も違う。僕とは違う方向から一人の患者さんを見ている。共同作業というか……。病院での治療も支援も医療者と患者さんとの共同作業なのかなって」

このセリフには MSW は異なる職種や立場のスタッフと連携する必要性を示唆し、それぞれの職種の考え方を認め合うことの重要性についても描かれている。

以上のように、漫画「ビターエンドロール」では、MSW の多種多様な業務が、患者のニーズに合った支援を提供するための方法として描かれている。セリフを通じて、MSW の専門性や価値、倫理とともに連携の重要性が描かれ、患者との信頼関係を築きながら継続的な支援を行う姿勢が浮かび上がってくる。このよ

うに MSW の専門性や価値について極端に偏った形ではなく、業務指針や倫理綱領にも沿った形で描かれていると言える。

V 考察と課題

1. 考察

「ビターエンドロール」という作品を通じて MSW の職業像について検討してきた。まず、各話で MSW が患者に紹介した社会福祉サービス、社会資源についてはケースによって様々な社会資源を問題解決の手段の一つとして使用する姿が見られた。このことから MSW がこれら社会資源を使って患者・家族たちと関わる職業であることが分かる。そして、社会資源の紹介だけで解決できないほど患者・家族が抱える問題は多岐にわたり複雑であるため、MSW は業務指針にある援助を倫理綱領に基づいて解決していくことになる。もちろん制度上の利用条件など詳細な点で違うところ（住所地がない場合の退院後の生活保護申請など）もあるが、漫画のストーリー展開上の表現としての問題は無いと考える。

業務指針の6つの業務範囲と倫理綱領に当てはまる漫画での MSW の行動を検討してみたところ、退院援助を行う場合でも単なる医療的な手続きだけでなく、個々の患者や家族の心情や社会的状況を繊細に考慮し、総合的なサポートを提供する MSW の専門性を示していたと考えられる。家族で抱え込むことの危険さと同時にうまくいかない不安に対しても寄り添いながら対話し、退院後の生活を案じながら退院調整を行っていく姿も描かれていた。社会復帰援助や受診受療援助においても主人公MSWが患者の主体性を大切に、彼らが自らの人生に対して選択を行えるようサポートする姿勢を浮き彫りにしている。このようなアプローチを通じて、MSW が個々の患者の尊厳と意思決定の重要性を大事にしている点を見ることができる。

「ビターエンドロール」はあくまでも現実に起きるようなエピソードで描かれ、MSW の業務を丁寧に描いた作品であるといえる。漫画はそれらをベースにして、クライアントたちの悩みや葛藤、そこに起きている人間関係を描き、関わる MSW の側の葛藤や人物像を描くことで「物語」として成立させていくことになる。

このような MSW 側の人物像があること、物語であることは、前述した田中のいう「人間としてのソーシャルワーカー個人に焦点を当てた」ものとなり、一般の読者等の共感を呼びやすくなると考えられる。特に主人公 MSW を新人にし、先輩 MSW との会話や先輩 MSW との関わりの中で、クライアントとの関わりや関係性での留意点などを示していくことで MSW が独りよがりで考えるのではなく、広い視野を持ってクライアントと関わることになることを示している。このような表現は専門書や入門書では描き切れないものであり、「ビターエンドロール」のストーリーを読むことで MSW の職業像をさらにイメージしやすい形に示してくれていると考えられる。これは漫画というフィクション作品だからこそできることだと考えられる。MSW を描くフィクション作品だからこそ、魅力的な形で描くことができおり、それが中・高生にも分かりやすい形につながるだろうと考える。しかしながら、やはり MSW がどのような仕事をしているのかを一言で表現できるほど明確な職業像とは言い難く、読者が将来 MSW を選びたいと考えられるほどの要素としては弱いのかもしれない。

2. 課題

ここでの課題は作品自体に関するものではなく、MSW の職業像を理解する上での課題である。

この漫画は MSW やソーシャルワークに携わった経験がある人には理解しやすい描写が多く含まれており、共感を呼ぶ部分が多いが、社会福祉やソーシャルワークに無関心な人にとっては MSW の仕事内容が明確に伝わりにくい可能性があると考えられる。もともとソーシャルワーカーという職種のイメージが難しいこともあり、医師のように「病気を治す」という明確で分かりやすい目的がないため、どんな職業なのか一言で言い表すことが難しい。漫画の中でさまざまなケースを解決しているものの、その業務の中でクライアントの自己決定を尊重するなど、どこまで援助すれば自己決定を尊重したことになるのか、という明確な形があるわけではない。このような業務の広がりや曖昧さも MSW の職業像が分かりにくくなってしまふ要因でもある。MSW 自身が「私たちの仕事はこういうものです」と一言で言い表せず、職業像を分かりやすく伝えられないことが課題と言える。しかし実際の業

務はそのような曖昧さを持っているのも事実であり、その中で分かりやすい表現を日々考えていく必要がある。

また MSW というソーシャルワーカーが社会福祉専門職であると結びつかない可能性についても課題と言える。例えば秋山の調査(2007:231)によると社会福祉従事者が自らをどう呼ぶと最もしっくりくるかという自己イメージを聞いたところ、全体では「ソーシャルワーカー」が26.3%となっており、最も多いものの、相談援助に関わりながらもソーシャルワーカーと名乗っていない社会福祉専門職は非常に多く、一般の人にとってソーシャルワーカーが社会福祉専門職であるとイメージできない可能性がある。特に医療現場にいる MSW は社会福祉職ではなく医療職の一つと考えられてしまうのが自然だろう。そのため漫画作品のなかで MSW の資格として「社会福祉士」や「精神保健福祉士」であることがどこかのタイミングで明示されること、または主人公の養成課程のエピソードがあると読者にも分かりやすかったかもしれない。しかし厳密に言えば、社会福祉士や精神保健福祉士は資格がないと名乗れないが、資格を持っていなくてもソーシャルワークを行っている人は「ソーシャルワーカー」を名乗れるため、このような資格と名称の乖離は非常に分かりにくく、その意味を一般の読者に理解してもらうことは難しい。

もうひとつ課題を挙げるとすれば、このような漫画の連載媒体である。MSW 漫画に共通していることは連載されたのがいわゆる青年誌系の雑誌がほとんどで少年誌での連載は一度もない。そのためこれから社会福祉を学ぶことを考える世代にまだ届いていない可能性も考えられる。

VI まとめ

本研究は「ビターエンドロール」という漫画から得られる MSW の職業像について考察し、これから社会福祉を学ぶ学生にも選ばれるための要素や課題について考えることである。「ビターエンドロール」はフィクションであるが、MSW の業務指針や倫理綱領に書かれている価値に基づいた職業像を丁寧に描写しており、MSW という職業像が大きく誇張されることなく、魅力的に描かれていることが分かった。もちろん実際

のMSWの業務では物語のようにクライアントの職場や家に訪問になかなか行くことができない職場環境にあることも少なくない。そのため、漫画の描写、必ずしも一般的なMSWの業務を指しているとは限らない。しかし他の職業漫画同様、現実と理想像、または非現実を織り交ぜながら描くことで漫画というエンターテインメントが成立するのであり、仮に非現実的なエピソードがあったとしてもそれは漫画にとって必要不可欠な要素である。また漫画の中で理想化された側面を取り入れることは読者にMSWの理想像を想像させることになり、MSWの職業像としてもさらに理解しやすくなるものにつながると考えられる。

また「ビターエンドロール」はMSWの業務を丁寧に描くだけでなく、前述しているように「ソーシャルワーカーの人物像」が上乘せされていることが理解しやすくさせる要素になっていると考える。他の職業漫画、例えば「ブラックジャック」が医師から愛されている要因も単に医療技術がすごいことではなく、ブラックジャックの作品が持つヒューマニズムや人情味、医療や社会の矛盾などの描写と、その中で医師としての葛藤や理想像が描かれているからだと推察される。「ビターエンドロール」でも主人公の犬飼賢児はクライアントに寄り添い、悩み、葛藤し、時にはクライアント以上に泣きながら、一緒に問題の解決に乗り出していく。このような姿を見て、MSWという職業を知ることができるのがこの作品の強味であり、フィクション作品だからこそできることなのだと考える。

人物像を描くことがその職種の職業像をより深めていけるのであれば、例えば専門職養成校でMSWに講義をしてもらうときに経験した事例を話してもらうだけでなく、その時にワーカー自身が何を考え、葛藤したのかなどの人物像にも焦点を当てて、話してもらうように心掛けることができれば、人間性にも触れることとなり、共感を呼び、将来その職種を目指すきっかけになる可能性もある。ただしこれはまた別の研究課題として取り組んでいく必要があると考える。

現在、MSWをはじめとする社会福祉専門職は中・高生の間で認知度が低く、日本の社会福祉は人材不足、理解不足という深刻な課題に直面している。身近にあり、少なからず自身も行ったことがある医療機関にいる社会福祉専門職であるMSWの存在を知ってもらうことは社会福祉専門職の認知度を向上させるためにも

大事なことだと考える。

漫画やメディアを活用することは、MSWを含む社会福祉専門職の存在を広く知らしめ、少しでも関心をもってもらうことにつながると考える。他の職業漫画のように人気が高まり、メディア展開が進むことで社会的な評価や関心が向上する可能性はある。ただし、そのような自然発生的に社会化するのを待つだけではなく、専門職団体が積極的にこのようなメディアを活用し、職業の重要性をアピールし、社会的な関心を喚起する取り組みを行っていくべきである。具体的には大阪医療ソーシャルワーカー協会が行ったように、高校への情報提供や普及・啓発活動を通じ、社会福祉への理解を深める取り組みを行うなど、早急に多様なアプローチを行う必要がある。そのために都道府県の専門職団体レベルではなく、統括する日本協会や国レベルでのアプローチが必要と考える。例えばソーシャルワーカーデーなどを使って様々なイベントを行うにあたり、漫画のキャラクターを使用したポスターなどの制作やイベントを企画し、中・高生や福祉に関心のある層に向けて発信することは難しいことなのだろうか。

今後も魅力のあるMSWを描く漫画やメディアが出てくると考えられる。漫画家が描く作品は一人でも多くの読者に楽しんでもらうためのものであり、MSWの社会的認知を向上させるために描いているのではない。しかし佐倉が1巻の本体表紙の中で数ある職業の中から「MSWが気になりますね」と関心を持ってもらい、同じく1巻のあとがきで「MSWという職業はとて奥が深く、考えさせられることが沢山あります」と書かれてあるように、MSWは漫画の題材になる魅力的な職業であるということは間違いない。そのような中で作られた作品が良質なものであればあるほど、MSWとしても様々な形で活用していきソーシャルアクションを展開していくべきである。専門職団体の積極的なタイアップができれば、漫画作品だけでなくMSWの存在を広く知らしめ、その役割を少しでも理解してもらうことにつながる。それがMSWの社会的認知の向上や将来的な社会の変化をもたらす可能性につながると考える。

謝辞

本論作成にあたり、「ビターエンドロール」を創作した作者佐倉旬先生とそのスタッフの皆様、講談社編集部の皆様、ならびにこの作品に関わった皆様に感謝と御礼を申し上げます。
ありがとうございました。

注

- 注1) 全国各地の医療機関とジョンソン・エンド・ジョンソンが2011年から行っており、2023年にも何度か開催されている。
- 注2) 産経新聞 ENAKの記事では「海上保安庁によると、採用予定数約100人に対し、2作目の映画公開直前の4月3～10日に受け付けた志願者数は昨年より978人増え、過去最高の5467人を記録。最終合格者は254人で倍率21.5倍の狭き門となった」ことが書かれている。
- 注3) 横山が2003年にテレビドラマ「天使のように生きてみたい」について、田中が2012年にテレビドラマ「Ns あおい」に出てきたMSW像についてそれぞれ分析している。両氏は他にも小説や漫画、ノンフィクションのテレビ番組についても分析しており、田中(2014:34)は「ソーシャルワーカーの職業像についての研究は潜在的な福祉ニーズを持った利用者の掘り起こしや将来の福祉人材確保の点からも重要である」ことを述べている。

引用文献

- ・秋山智久「社会福祉専門職の研究」ミネルヴァ書房 2007年
- ・ジョンソン・エンド・ジョンソン「未来の医療を担う子どもたちへブラック・ジャックセミナー」
<https://www.jnj.co.jp/jjmkk/medtech-story/story10>
(2023年10月20日閲覧)
- ・柏木一恵「精神保健福祉士を取り巻く危機的状況への対応」精神保健福祉 53 (2022) 228-234
- ・厚生労働省健康局長通知「医療ソーシャルワーカー業務指針」2002年
- ・小嶋章吾「新しいMSWのポジショニング」地域包
- 括ケア時代の医療ソーシャルワーク実践テキスト
日本医療ソーシャルワーク学会編 日総研出版
(2018) 225-226
- ・三橋真人「わが国における国家資格としての『ソーシャルワーカー』認知度調査—高校生までの福祉教育からの時系列的体験に焦点をあてて—」同朋福祉号 25 (2018) 149-178
- ・社会福祉法人兵庫県社会福祉協議会 社会福祉政策委員会「調査研究事業『福祉人材確保・定着に向けた学生の意識調査』報告書 2016年 兵庫県社会福祉協議会 Web ページ「ひょうごの福祉」<https://www.hyogo-wel.or.jp/about/research.php> 2023年5月15日閲覧
- ・佐倉旬「ビターエンドロール」1巻～3巻 講談社
- ・田中秀和「医療ソーシャルワーカーを描いたノンフィクション番組に関する一考察」新潟医療福祉学会誌 8 (2) (2008) 30-34
- ・田中秀和「医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマにおける職業像の研究」新潟医療福祉学会誌 12 (2) (2012) 2-7
- ・田中秀和「コミュニティソーシャルワーカーを描いたテレビドラマにおける職業像の研究」新潟医療福祉学会誌 14 (2) (2014) 33-38
- ・医療ソーシャルワーカー倫理綱領 行動基準 日本医療ソーシャルワーカー協会 (2022)
- ・プレスラボ「医師アンケート企画現役医師が選ぶ『好きな医療漫画』ランキング【前編】～1位に輝いたのはあの名作」医師転職ドットコム エピロギ
<https://epilogi.dr-10.com/articles/3913/> (2023年10月20日閲覧)
- ・「『海猿』で海保人気志願者急増 空自は…」産経新聞 ENAK
<http://www.sankei.co.jp/enak/2006/aug/kiji/24tvUmizaru.html#:~:text=%E6%B5%B7%E4%B8%8A%E4%BF%9D%E5%AE%89%E5%BA%81%E3%81%AB%E3%82%88%E3%82%8B%E3%81%A8,%E3%81%AE%E7%8B%AD%E3%81%8D%E9%96%80%E3%81%A8%E3%81%AA%E3%81%A3%E3%81%9F%E3%80%82> (2023年7月17日閲覧)
- ・横山豊治『ソーシャルワーカーを描いたフィクション作品に関する一考察—医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマの事例検討—』新潟医療福祉学

会誌 3 (2) (2003) 89-96

- ・横山豊治「フィクション作品に描かれる MSW の働き」病院 71 巻 3 号 (2012 年) 225-228

参考文献

- ・保正友子、鈴木真理子、竹沢昌子「キャリアを紡ぐソーシャルワーカー 20 代・30 代の生活史と職業像」筒井書房 (2006)
- ・木下大生、後藤広史、本多勇他「ソーシャルワーカーのジリッ自立・自律・而立したワーカーを目指すソーシャルワーク実践」生活書院 (2015)
- ・くじらいいく子「いとしのタンバリン」小学館 (2011)
- ・児島美都子「新医療ソーシャルワーカー論」ミネルヴァ書房 (1991)
- ・児島美都子、成清美治 編「現代医療福祉概論」学文社 (2002)
- ・村上武敏「医療福祉論退院援助をめぐる社会科学的な探求」明石書店 (2020)
- ・冴木奈緒「M.S.W. 医療ソーシャルワーカー」小学館 (1984 年)
- ・阪口みく「医療相談室の星 医療ソーシャルワーカーの日誌より」双葉社 (2015)
- ・さくらいもところ 大倉かおり「MSW 相談室、ナツミです」角川書店 (2008)
- ・手塚治虫「ブラックジャック」秋田書店 (1974)
- ・山田宗樹「八雲にて」幻冬舎 (2008)
- ・山田宗樹「人は、永遠に輝く星にはなれない」小学館 (2008)

※本論文内に使用した「ビターエンドロール」の表紙、使用画像については講談社に使用確認を行い、許可をいただいています。